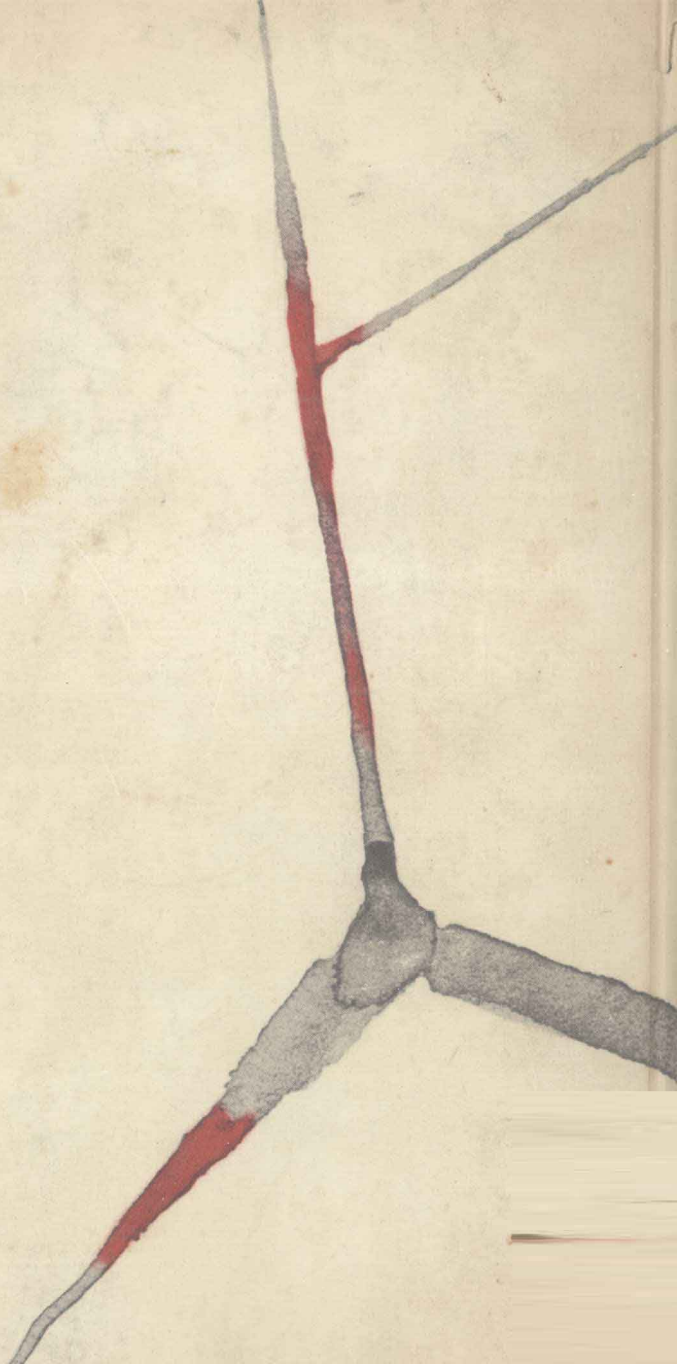


戦国一切経

下卷





戦国一切経

下卷

村上元三

中央公論社

戦国一切経 下巻 © 1964 検印廃止 定価450円
昭和39年8月5日初版印刷 昭和39年8月10日初版発行
著者 村上元三 発行者 宮本信太郎 印刷者 草刈親雄

発行所 中央公論社

東京・京橋 2-1 振替・東京 34

戦国一切経

下卷

戦国一切経 下巻 目次

道明寺楠 どうみょうじほししい

橙武者 だいだい

白い鬼

真田六文銭 ろうくもんせん

八千八声 はっせんやこえ

啞の次郎次

百間砦 とりで

蝙蝠 こうもり

あやかしの笛

流星

二六

四六

五七

九二

一〇六

一三三

二二七

二四九

二六五

五月七日の朝

一八四

八寒地獄

二〇二

生身供養

二二六

火焰の城

二四七

一殺多生

二六五

赤い雲

二七九

大慈大悲

二九二

一切度苦厄

三〇五

装幀・挿画 岩田専太郎



どうみょうじはしい
道明寺楠

夜明け前に、叩きつけるような勢いで雨が降ったが、それも朝になるころ、さっとやんでしまった。

じりじりと五月の朝日が照りつけ、それまで濡れていた地面は見る間にかわいて、霧がひろがりはじめた。

四天王寺の三門を出るときから、薄田隼人正兼相はひどく機嫌が悪く、噛みつきそうな顔つきになり、馬の轡をとる足軽をむやみに叱った。

「このようにじっくりと構えていて、勝てると思うているのか。いずれも名将ぞろいゆえ、わしの軍略など役に立たぬという訳か」

怒りの持つて行きどころがない、といった風に隼人正は、馬上でひとり言をいい、まっすぐに平野へ引返しはじめた。

大坂から二里、平野に隼人正が陣を張ったのは、ゆうべ、

五月四日の夜のことであった。

真田左衛門佐幸村と毛利豊前守勝永は、四天王寺に陣を張っているが、隼人正兼相と後藤又兵衛基次、それに明石掃部頭全登は平野に扇形に陣を張り、藤井寺から道明寺の方面を固めた。その総数は、およそ五千、奈良から河内へ

入ってくると思われる徳川勢に備えるためであった。

しかし隼人正は、自分が単独で戦うことを主張し、けさも四天王寺へ引返して、真田幸村に直談判を試みた。

だが、その結果が思わしくなかったのは、三門を出てきたときの隼人正の表情を見ただけで、家来たちにもわかった。

去年の合戦のとき、博労ヶ淵の砦を留守にして、そのあいだに徳川勢に砦を奪回されてから、豊臣勢の中で薄田隼人正の評判が悪くなった。

諸国の浪人の中でも聞えた豪勇の侍なのだが、隼人正は将兵を用いる術を知らず、正月の飾りの橙と同じように、見かけだけで役に立たぬ、というところから橙武者という異名を奉られていた。

隼人正がこんどの戦いで、その汚名を雪ぎたいと思い、自分が率先して敵に当らうという覚悟でいるのは、明らかであった。

五日前、奈良に到着した徳川勢は、松平上総介忠輝、松下総守忠明、本田美濃守忠政、それに水野日向守勝成などの諸将で、総勢三万といわれている。

おそらく徳川勢は、奈良から亀瀬越え、あるいは関屋越え、どちらかの山道を経て河内国へ入り、道明寺から藤井寺の方面を衝くに違いない。

そう見てとった豊臣勢は、大坂城下の外で敵を撃破する

と決して、野戦に巧みな五人の将を繰り出したのであった。しかし、真田幸村は、城を出て戦うのは不利、大坂城下を焦土にしても、敵を引きよせて戦うべし、と主張したが、それは容れられなかった。

「大野治長づれに、戦さの駆引などわかるものか」

馬上でぶつぶつ独り言をいっている薄田隼人正の、鉢金入りの鉢巻をしめた額から、汗が吹き出していた。

こうやって鎧に陣羽織をつけ、馬にまたがり、三十騎ほどの将兵をひきいて、五月の朝日の下を進む隼人正の姿は、橙武者と悪口を言われるのが気の毒なほど、さっそうとした武者振りであった。

「真田左衛門が戦いに得手というても、若年のころ、父の安房守昌幸に従って徳川勢と戦うただけではないか。ふん、世上に聞え高い軍師などと、評判を鼻にかけおって」

博労ヶ淵の砦を留守中に奪回された、という不面目はあるが、真田幸村に実戦では決して劣らぬ、という自信が隼人正にはある。

だから今朝も、後藤基次、明石全登の二人と緊密な連絡をとって、決して先駆けなどはないよう、と真田幸村に注意をされたのが、隼人正にとっては腹に据えかねる。

奈良に集結した徳川勢は大軍だし、それが一時に信貴山と金剛山のあいだを突破して関谷を越え、道明寺口から藤井寺、そして平野のほうへ進撃してきたら、どういうこと

になるかぐらいのことを知らない隼人正ではない。

だから今日のうちに、こちらから関谷越えをして、徳川勢の出鼻を挫いておく必要がある、と説いた隼人正の主張を、真田幸村は聞き入れてくれなかった。

「こたびの戦いは、よくよくの大事でござる。構えて功名手柄など立てようと思われな」

隼人正から見れば、四十六歳という年より老けていて、まるで山奥に住む隠士のようにさとりました表情でそう言った幸村の言葉が、いまでも耳許に残っていて、新しい怒りがこみあげる。

「比べものにならぬ数の多い敵を引受けて戦う時は、尋常の軍略ではならぬもの、と心づかぬのか、幸村は」

また隼人正が独り言をいったとき、十間ほど先を走る堀口茂兵衛という侍が、急に鋭い声を出した。

「何者だ、そのほうたちは」

ここは、薄田家の陣屋のある平野に近い正覚寺という寺の近くで、畑の中に三十戸ほどの家がかたまり、道はその村の横から正覚寺の山門前を通って、平野のほうへ向っている。

先頭を行く堀口茂兵衛は、隼人正が故郷の大和橋の里にいたころから、そば近く使っている若い郷士で、忠実な家来であった。

顔の丸い、まるで子供のような眼鼻立ちをした茂兵衛が、

馬上に槍を構え、草むらの中を睨みつけている。

「何事だ、茂兵衛」

ほかの家来たちと一緒に隼人正は、馬を近づけて行った。草むらの中をのぞいた隼人正は、拍子抜けがし、次には腹が立って、堀口茂兵衛を叱りつけた。

「こんな者たちを、いちいち咎め立てする奴があるか」

「しかし、ご主人様」

茂兵衛は馬上で、子供のように口を尖らせながら、

「この女め、この草むらの中から小さな手鏡で、何やら離れたところへ合図を送っておりました」

そう言われて隼人正は、改めて草むらの中を見おろした。下ぶくれの、派手な顔立ちをした旅姿の娘と、十五六と思われる粗末な身なりをした少年が、抱き合うようにして草むらの中に坐っている。

たしかに、その娘は小さな懐中鏡を持っている。

「調べてみい」

隼人正に言われて、茂兵衛は、噛みつくような調子で娘に訊いた。

「そのほう、いずれの者で、いずれへ参る」

「大坂城下の者でございますが、家を焼かれましたので、これから郡山のほうへ参ります」

「その子は」

「弟でございます」

「名は」

「わたくしは、りょう。弟は次郎」

「通行手形を持っているか」

「父が持っておりますが、わたくしたちとはぐれてしまいましたので」

その娘の声は、妙にかすれて、男のように太い。それでいて、何ともいぬ艶があった。

「その手鏡に陽の光を受けて、どこぞへ合図を送っていたな」

畳みかけて茂兵衛に問われ、その娘は、色っぽい笑いかたをした。

「そのような覚えはありません。髪を直しておりますので」

「そうは見えないんだ」

と茂兵衛は、まだ疑いを捨てずに、

「では、次郎というその子供に訊ねよう」

「無駄でございます」

「なんだと」

「この子は啞で、つんぽでございます」

何か言いかけて茂兵衛は、顔を逆撫でにされたような表情になって、隼人正を見た。

「なんと致しましょう」

「そのようなことに手間取っているゆとりはない。参れ」

こんどは隼人正が先に立って、馬を進めはじめた。

薄田家の侍たちが土煙を立てながら、正覚寺の門前を走りすぎるのを、りょうなどと名乗った於柳は、微笑を浮かべながら見送っていた。

「顔を知られずにいて、助かった」

手の中の小さな鏡を隠そうともせず、もう薄田隼人正や家来たちが引返してくる筈はない、と見とどけておいて於柳は、

「お前は物も言えず、何も聞えないが、人の唇の動きだけを見て、対手の話の中味がわかるのだったね」

じつと於柳の唇を見ていた少年は、黙ってうなずいた。

これは、近江宗左衛門のところに養われていた次郎次であつた。

「それなら、わかったね。わたしが合図を送っている先は、これまでお前も会ったことのある人の家来だから、心配は要らない」

と於柳は、通りがかりの人が見たら、旅の若い女と少年がひと休みをしている、としか思えない外見はのん気な様子で、ゆっくりと手の中の小さな鏡を動かした。

その鏡は、五月の朝の陽を受けて、遠くへ光を送った。

草むらのあいだから、用心をしながら鏡の光を送っている先は、正覚寺とは反対側の畑の中にある小さな農家であつた。

鶏の聲が聞え、遠くにゆっくりと牛が動いている平凡な田舎の風景だが、その向うの村の中や丘の蔭には、ちかちかとおびただしい数の鎧が光り、旗差物はたさしものが風になびいている。

この平野まで進出した豊臣勢の先陣が、ゆうべからこのあたりに陣地を築き、後方との連絡をとっているのであつた。

ときどき於柳は、まぶしそうに眼を逸らした。

光を送っている農家の納屋の中からも、斜めに太陽の光線を受けて、やはり小さな手鏡が光っている。何かでそれを押えながら、三べん続けて光を送ると、こんどは一定のへだたりをおいて二つ、それから四つ、三つ、という風に、鏡の光が点滅している感じであつた。

「三つというのは、道明寺のあたり、二つとは藤井寺、わかるね」

次郎次へ自分の唇の動きを見せながら、於柳は呟いた。

「徳川勢は、今日か明日のうちに、まず道明寺口へ攻めかかるらしい。わたしたちも忙しくなるよ。さあ、合図はこれで終りだ。出かけよう」

手鏡を帯のあいだにしまい、立ちあがろうとしてから於柳は、顔をしかめた。

「やけどが痛む。いえ、これはお前が聞かなくてもいいことだ」

その於柳を次郎次は、手を出して支えてやった。

淀川で大部丸が筒井一夢の身内たちに襲われた晩、坂手甚五左衛門と於柳のほか、小豆島から舟子ふねこになって船に乗ってきた郷士のうち三人だけが、ようやく水へ飛び込んで逃れた。不意をつかれ、いきなり船に火をかけられたので、それを防ぐ間もなく、船上に積んだ玉薬の箱が火を発し、すぐに大部丸は火と煙に包まれ、すさまじい音を発して水中へ沈みはじめた。

十介と打合せた通り、大部丸に積んできた鉄砲と玉薬の荷の半分を渡辺の里へ運ぼうとしていた矢先だけに、暗い川の上を音を立てずに近づいてきた小舟に気がつかなかったのは、たしかに坂手甚五左衛門と於柳の不注意であつた。しかし、それが筒井一夢の身内たちの奇襲、と於柳が気がついたのは、ようやく甚五左衛門たちに助けられ、淀川の北の岸へ泳ぎ着いてから後のことであり、水面には煙がただよっているだけで、もう大部丸の姿はなくなっていた。爆音と火の手を見て、すぐに高張提灯を立てた船番所の小舟がいくつも近づいてきたので、甚五左衛門や於柳は暗い中を北のほうへ逃げた。

船に残っていた舟子の二人が、火と煙に包まれて川に沈んでしまったらしい、とわかったものの、もう引返して助ける術もない。

それから於柳は、相手の顔も見えない暗やみの中で、坂

手甚五左衛門と今後のことについて、あわただしく打合せをしたのち、闇の中へ姿を消した。

その於柳が、近江宗左衛門の隠れ家へ行つて、次郎次を連れ出し、旅姿でこの平野のあたりへ現れたのは今朝のことであつた。

いまにも豊臣徳川両軍のあいだに再度の合戦が行われようとしている現在、わざわざ於柳がこんなところへやつて来たのは、どんな目的があるのか、口の利けない次郎次には訊ねることも出来ず、また、次郎次にとってはどうでもいいことらしい。

黙つて次郎次は、於柳と一緒にここまでやつてきて、これからも於柳の言いつけ通りに動こうとしている。その次郎次も、自分の本当の父親が徳川家の旗本多兵衛ということは、まだ近江宗左衛門から教えられていないと見える。「さあ、わたしたちも道明寺のほうへぶらぶら歩いて行こう」

と於柳は、草むらの中に置いてあつた自分と次郎次の笠を手にとって、少しびっこをひきながら歩き出した。

大部丸が焼打ちされた晩、於柳は、右の膝の上からふくらはぎにかけて、やけどを負つたまま川へ飛び込んで逃れたが、その傷が動くたびにうずく。

「まさか、道明寺の中へまで侍たちが押し込んで来るようなことはあるまいから、手当をさせてもらおう」

次郎次の眼を見ながら、ゆっくりと於柳は口を動かした。人の唇の動き方を見て、何を話しているのかわかるようになるまで次郎次が訓練を積んだのは、やはり近江宗左衛門に教えられたからであつた。だから、一緒に旅をしている限り、於柳の意思は次郎次にも通じるし、不自由は思つたよりも少い。

「おや、あれを見てごらん」

そう言つた於柳の唇から、次郎次は視線を畑の中の百姓家のほうへ移した。

腰ぎりの短いぼろぼろの布子（ぬす）一枚に、鍬をかついだ薄汚い百姓がひとり、ゆっくりとその家の納屋から出て、畑の中を北西の方角へ歩き出している。

さっきまで納屋の窓の中から、於柳へ手鏡で合図を送つていた相手に違いないが、そうやって歩いている姿からは毛筋はともそれらしいものはただよわせていない。

畑で働くのに疲れてはいながら、いくら戦いが身近かに迫つても、自分の家と畑を守つて少しも動くまいとしている百姓になり切つた姿であつた。

「ふん」

於柳は、鼻の先で笑つた。

「本多兵衛の手の者にしては、大そううまく化けている」次郎次に見せるように口を動かしたのではないが、そう呟いてから於柳は、はっとしたように次郎次の横顔をのぞ

いた。

だが次郎次は、於柳の口から本多兵庫という名が洩れたのを、眼で確めたのかどうか、百姓姿の男が畑の中を歩き去って行くのを、ぼんやりと見つめている。

「さあ、行こう」

次郎次の腕をつかんで、於柳は正覚寺のほうへ歩き出した。

このあたりは、ゆうべから今朝にかけて、豊臣勢の先手が何べんも往来したらしく、おびただしい馬の蹄の跡がついている。

正覚寺の中で昨夜、その先手の軍勢はひと休みしたと見え、門前の道を大ぜいの足が踏み荒しているし、空の米俵や野菜の籠などが、雑多に散乱していた。

すでに正覚寺の寺僧たちは逃げ出したらしく、しいんと寺内は静まり返っている。

「この様子では、もう仲間の人たちはここに残っていないと見えるね」

山門から境内をそつとのぞき込み、於柳は呟いた。

あまり大きな寺ではないが、鐘楼も客殿も古びて、昔の生えているような感じであった。

「なんだ、お坊さんが残っているじゃあないか」

と於柳は、妙な顔をした。

境内に、半分ほど米の入った米俵や、土鍋、釜などがほ

うり出したままになっているのは、大ぜいの将兵が寺へ入り切れず、境内で煮たきをした名残りであろう。

それを、墨染の衣をまとった僧侶がひとり、ていねいにあと片づけをしている姿が見える。

近づいて行つた於柳が声をかけようとしたとき、その僧は振り返って声をあびせた。

「ここはわし一人で片づける。おぬしは道明寺へ急げ」

素足に草履をはいたその僧は、雪川であった。

僧侶たちの逃げ去ってしまったこの正覚寺の中へ、どういふ風にして雪川がまぎれ込んだのか、ゆうべ、ここに陣を張つた豊臣勢の先手とのあいだにどのような交渉があつたのか、於柳も知りたいところだが、雪川は質問するゆとりを与えなかった。

いつもの尖り立ったような顔つきが、なおのこと険しくなり、雪川は於柳を叱りつける調子で言つた。

「早う行け。最前、あの百姓家の中から、そなたと手鏡で合図を交していた本多兵庫の手の者、無事に天王寺まで引きあげられるやらどうやら、わからなくなったぞ」

「感づかれましたか、徳川方に」

「そなたの父親に、だ。いやいや、筒井一夢はもはや、そなたの父親ではなかったのだな」

「あの男は、わたくし共の敵でございます」

「それなればよいが」

何か言いかけてから雪川は、ほかのことを口にした。

「まだ今日のうちは、合戦にはなるまい。いまのうちに道明寺へ急いでくれ。あの寺にごさる華照という尼どのを裏口から訪ねて、これを見せよ。味方のいる場所を教えて下さる筈だ」

ちらりとあたりを見廻してから雪川は、衣の中から小さな香盒を取り出し、於柳に渡した。

「さあ、早う」

「和尚様は」

「わしは夜に入ってから、薄田隼人正を訪ねるが、くれぐれも先走りをするな。われらの姿が先に徳川勢に見咎められては、大事の妨げになるぞ」

「心得ました。では、参ります」

山門のほうへ引返そうとした於柳を、雪川は、

「待て待て」

呼びとめておいて、低い声になった。

「その次郎次という子供の父、今日のうちに姿を現そう。

だが、許しがあるまで手を出すな」

「許しがある、と申されますのは」

と於柳も、次郎次に唇の動きを見せぬよう気をつけながら、

「本多兵庫どのに油断をするな、という意味でございますか」

「黙って言われた通りにせい。行け」

「はい」

笠で顔を隠し、於柳は次郎次の手をとって、正覚寺の山門を出た。

それから道明寺へ向う道は、ゆるやかな勾配を上り下りして、畑の中を横切り、のどかな五月の風景の中を、あまり人家のない場所を通る。

しかし、すでにこのあたりは、豊臣勢の前哨陣地であつた。

諸方の森の中や丘の蔭には、小人数ながら、がっちりと柵をしつらえ、空濠をめぐらした砦が築いてあり、その中を抜けて道明寺口まで達するのは容易なことではない。

時間が経つにつれて、照りつける陽の光は強くなり、暑さが増してきた。

正覚寺を出てから三丁ほど行くと、豊臣勢の見張所があり、於柳と次郎次は、鎧をつけた侍たちに取調べを受けた。ここでも於柳は、奈良へ向う姉と弟で、と、薄田隼人の家来の堀口茂兵衛に答えたと同じ言葉述べた。その上、用意をしておいた通行手形を見せたので、無事に通行を許してもらえたが、二番目に、小さな社の門前にある見張所にかかったときは、そうは行かなかった。

「このような時に、何の用で奈良まで参るのだな」
以前は浪人暮らしをしていたと思われる髭の濃い、荒んだ